

第一部会（第25期・第5回）議事要旨

I 日時 令和4年4月18日（月）16:00～17:30
4月19日（火）16:00～17:00

II 会場 日本学術会議5階5-A（1）（2）会議室及びオンライン会議システムも併用して開催

III 出欠

<4月18日>

有田 伸、岩井 紀子、宇山 智彦、大竹 文雄、岡崎 哲二、岡部 美香、勝野 正章、上東 貴志、亀本 洋、苅部 直、川嶋 四郎、行場 次朗、栗田 禎子、黒崎 卓、小長谷 有紀、小林 傳司、坂田 省吾、佐藤 嘉倫、佐野 正博、白波瀬 佐和子、鈴木 基史、高倉 浩樹、高橋 裕子、高村 ゆかり、高山 佳奈子、谷口 尚子、西尾 チヅル、西田 眞也、西山 慶彦、野口 晃弘、芳賀 満、橋本 伸也、原 拓志、原田 範行、日比谷 潤子、松井 三枝、松下 佳代、松原 宏、馬奈木 俊介、三尾 裕子、水野 紀子、溝端 佐登史、三成 賢次、南野 佳代、森口 千晶、矢野 桂司、山田 八千子、吉田 文、吉田 和彦、吉水 千鶴子、若尾 政希、和氣 純子、渡部 泰明、和田 肇

<4月19日>

有田 伸、岩井 紀子、宇山 智彦、大垣 昌夫、大久保 規子、大塚 直、大山 耕輔、岡部 美香、上東 貴志、川嶋 四郎、栗田 禎子、黒崎 卓、小長谷 有紀、小林 傳司、坂田 省吾、佐藤 嘉倫、佐野 正博、白波瀬 佐和子、鈴木 基史、高倉 浩樹、高村 ゆかり、高山 佳奈子、西尾 チヅル、西田 眞也、西山 慶彦、野口 晃弘、芳賀 満、橋本 伸也、原 拓志、原田 範行、日比谷 潤子、松井 三枝、松原 宏、馬奈木 俊介、三尾 裕子、水野 紀子、溝端 佐登史、三成 賢次、南野 佳代、森口 千晶、矢野 桂司、吉岡 洋、吉田 文、吉田 和彦、吉水 千鶴子、若尾 政希、和氣 純子、渡部 泰明

IV 議事

<4月18日>

1. 開会にあたって

橋本部長より、対面・オンライン併用による開催、今回の部会の趣旨について、説明があった。

2. 前回議事要旨の確認

3. 報告事項

1) 会員任命問題をめぐる動きについて

高村副会長より、経緯の報告があった。

2) 第一部の活動報告

① 拡大役員会

橋本部長より、第5回及び第6回拡大役員会の報告があった。

② 第一部役員会

橋本部長より報告があった。

③ 第一部に関連する国際活動について

橋本部長より報告があった。

④ 第一部関連学術フォーラム・公開シンポジウム

橋本部長より報告があった（資料2）。

3) 分野別委員会・分科会の活動状況

資料3-1をもって、報告とした。

4) 部附置分科会の活動状況

資料3-2をもって、報告とした。

5) 「意思の表出」に係る第一部内諸規則の制定について

溝端副部長より説明があった（資料4-1、4-2）。

6) 幹事会等での取組に関連して

橋本部長より報告があった。

< 4月19日 >

4. 審議事項

橋本伸也部長：昨日に引き続き、第一部会を開催する。現在の出席者は会場25名、オンライン19名で、まだ増えるが、64名中44名で昨日よりは少ないものの、会としては成立している。昨日は報告事項で終わったので、今日は審議事項として挙げていることについて議論し、決定すべきことを決定する。明確な形で決定を要するのは、(3)の令和4年度第一部審議関連予算の配分である。最初にこの案件を処理し、残りの時間は夏に向けて様々な議論をしたい。

溝端佐登史副部長：資料6-1、6-2、6-3を見てほしい。2021年度予算執行についての協力に感謝する。今年度予算の方針は、基本的には例年どおり。既に3月23日の拡大役員会で承認されている。その内容の追認をお願いしたい。予算配分はこれまでと同じ。第一部の予算枠から共通経費を除き、残りを各分野別委員会・分科会で配分するという方式を踏襲している。資料6を参照されたい。

第一部の共通経費として拡大役員会と四つの第一部附置分科会の開催経費を確保し、例年どおり予備費として5%控除し緊急事態や新たに発生した事業に充てる。余った部分は、後期に再配分する。もう一つの共通経費は夏季部会で、東京で現地開催、オンライン又はハイブリッドの想定で予算化している。これらを除いた部分を各分野別委員会・分科会で割る。現在の構成で会議開催に必要な経費を計算した上で、総額を比率化し金額を当てはめていく。単価が19,600円なので、その倍数になっている。外部の参考人の謝金・旅費は別扱い。これまでどおりに執行すればよいが、基本的には分野別委員会に自主管理をお願いする。分科会活動の多寡によって、再配分は各分野別委員会で調整する。会員手当・委員手当・旅費は相互流用できない。旅費等の単位についても、しっかり読んでほしい。できるだけ予算を使わない会議運営の方法もあるので、分野別委員会・分科会で工夫し、限られた予算の執行をお願いしたい。以上に基づく全体像は、資料6-2をご覧ください。資料6-3に詳細がある。

橋本伸也部長：旅費に関して今回記述がないが、昨年度のうちに概算要求の時点で今年度の旅費について検討し、それに基づいて今年度の学会の予算が決まっている。コロナ禍のため、従前に比べてオンライン会議の比率が高くなっていることに鑑み、学会全体で旅費部分がかなり圧縮された。その部分を別の費目に移すことによって、現在様々な活動の改善が進められているという状況である。

→ 承認

橋本伸也部長：各分科会への配分については分野別委員会に任せるので、各委員長は分科会と必要に応じて調整しつつ、単価19,600円の倍数になるように配分し、決定額を事務局に伝えてほしい。昨年度同様、予備費としてそれなりの金額を用意している。昨年度も、執行状況をみた上で秋から冬にかけての段階で再配分を行った。今年度も同様のことがあり得る。夏季部会については、後ほど提案したい。次に「会員選考方針について」は、総会で幹事会が修文、最終判断は会長に一任となったので、この方向で進める。昨日これについて議論する時間が取れなかったが、何か意見があればここで出してくれれば、幹事会・会長に伝える。

→ 特段の意見なし

橋本伸也部長：次に(2)の「日本学会のあり方をめぐる CSTI 有識者会議とこれに関する会長メッセージ及び政府内における検討状況について」を取り上げる。資料5-1、5-2を見てほしい。昨年4月に総会の場で、「日本学会のより良い役割発揮に向けて」を決定した。それを受け、科学技術担当大臣の意向により CSTI の有識者会議においてかなりの頻度であり方についての議論が行われた。議事録は CSTI のホームページ上で公開されており、会員には部会等でその都度 URL を含め伝えてきた。1月21日に「日本学会のあり方に関

する政策討議取りまとめ」と題する文書が出された。2月1日に四役等の議論を踏まえ、その内容について学術会議からの最小限の回答として、基本的な考え方を共有しているところ、考え方の異なるところを明確に指摘した。その後、現在は「取りまとめ」を受け、内閣府の中で学術会議のあり方についての議論が進められていると聞いている。その内容について、現時点で私たちは知らされていない。7、8月には政府内の方針が決まるだろうと言われている。私たちは、政府の出す方針が「より良い役割」文書の方角になるような働きかけをしていくことになるだろうが、今日はこれについて会員の忌憚のない自由な意見を出してほしい。会長はCSTIで毎回学術会議からの報告として発言しており、冒頭部分は公開されていたが、それ以降は非公開のため私たちも必ずしもその全容を把握できているわけではない。

栗田禎子会員：確認だが、CSTIの取りまとめが出され今後夏に向けて内閣府の中で議論されるが、その内容は私たちには全く分からず、今の設置形態が大きく変わる可能性もあるということか。部長は何か把握しているのか。

橋本伸也部長：あるか無いかと問われれば、知らないというのが私の答えにならざるを得ない。議論の筋から判断するに、そのような方向が出てくるという推測は可能だが、私たちが何らかの情報を得ているということではない。

鈴木基史会員：今回のCSTI文書は暫定的なものか。

橋本伸也部長：CSTIとしては、最終的な文書である。

鈴木基史会員：内閣府から2件の審議依頼があり、今日の午前中それに関する説明・審議があったが、残念ながら第一部からの発信があまりなかった。第三部が中心となって、2件に関する学術会議としての方向性が示された。ここは第一部としての議論の場なので、私たちがどのように協力できるか考えてみたい。内閣府の審議依頼は、何かしらの試金石になりそうであり、政府が学術会議に対して今後どのような態度で臨んでくるのか、私たちが試されているような気がしてならない。これに対して真摯に伝えていくことが今後の協力関係にとって非常に重要である。第一部として2つの審議依頼に対してどのような貢献ができるのか。現状は自然科学的な方向性で進んでいるが、人文・社会科学としてはやや危険を感じる。どうすれば参画できるかを議論するのが、一つの方向性であろう。科学技術の発展で日本が国際社会から遅れている現状を人文・社会科学にどのように捉えるかということになるが、科学技術又は学識・学術知というものが日本社会の中であまり高く評価されていないのではないかと。以前はそうだったかもしれないが、徐々に地位が低下している。それが大きくマイナス材料として働いていると言える。科学技術・研究力強化または研究DX・オープンサイエンスというものを、社会と学術知の距離という観点から扱うことができれば、第一部として貢献できるのではないかと。一つの提案である。

橋本伸也部長：いずれの審議依頼にも対応する委員会があり、研究力については第一部の西山会員が副委員長、DXについても溝端副部長が入っているほか、どちらにも複数の第一部会員が参加している。たまたま委員長が第一部所属ではなかったというだけのことで、いずれの課題も三つの部にまたがって取り組んでいる。この場で、各案件について言うべきことを指摘してもらい、第一部所属の委員に委員会での審議にどのように反映させていくか考えてもらうのがよいのではないか。一方で研究力に関しては、私たちが考えているスパンと内閣府が出してきた研究時間確保の間には、かなりの落差がある。どのように反映させていくか、限られた時間の中でかなり知恵を絞らなければならない。

西山慶彦会員：委員会が元々志向している方向と今回の課題にはかなりの違いがあり、菱田副会長もマイクロクエストと言ったが、研究時間を確保するためにどうすればいいか、博士課程の大学院生がどのようなキャリアを持ちうるか等、マイクロクエストに対してマイクロアンサーをすることになるのではないかという感じがする。個人的な感想だが、社会自体そして政府も学術を儲けの手段あるいはサービス産業の一環と捉えているのではないか。そのあたりを突いてもいい議論ができるかどうかは分からないが、学術・研究とは何かを整理・議論することは第一部の中で十分できると思うので、意見を知らせてもらえれば、反映させていきたいと考えている。

橋本伸也部長：西山会員から研究力強化の話が出たので、これとCSTIについて、もう少し意見を募りたい。

吉岡洋会員：私は研究力という言葉自体に違和感を覚えている。今日大村先生から、子どもの時から農作業をしつつ土に親しみ、その中にいる細菌が生成する物質から誘導したものを発見、半世紀近くこのようなことをしてきたという話を聞いたが、これが研究力ではないか。哲学系の分野であれば、研究力とは何かを根本から考えることでしか貢献できないと思う。

白波瀬佐和子会員：情報をどの程度理解しているか自信はないが、CSTIそして研究力全体の議論が極めて理系的である。イノベーション会議の中で、人文社会系との情報の非対称性が著しいと感じている。中での議論の詳細が分からないままにこちらで議論すると後ろ向きだと言われるが、もちろん若手にとってはマイクロな議論は共通していると思う。その一方で、枠組みとして、任命の問題、ウクライナ問題もあり、総会では栗田会員から平和の問題も出たが、こちらが根幹的なことを言おうとしているのがうまく通じていないようだ。このイノベーションに政府の大方針が絡んでいることは事実だと思う。それが国際学術会議にも反映されており、次期会長は今のイノベーション会議に出ている。ものすごい情報格差があるので、参加者がどの程度人文社会的な事柄を共有し、生産的な発言ができるような環境が作れるかが一つの課題だと思う。

芳賀満会員：同様の危惧を抱いている。所謂「サイエンス」に、人文・社会科学を加えた「総合知」が最近もてはやされており、私たち人文系は入れてもらって嬉しいような気もするが、本当なのだろうか。うまく誤魔化されているのではないか。自分の分野では、政府が文化財について主張するのは保存と活用のうち主に活用の方だが、私たちは、本来は保存だけでもいいと考えている。「総合知」なるものに騙されてはいけないとの危惧を抱いている。

小林傳司幹事：CSTI の政策討議に陪席していたので、ある程度議論の様子は分かっている。まず人文・社会科学を取り込むことは、法律の改正による。政府の文書でも文言上は「人文・社会科学固有の振興策を考える」と書いてある。しかし、現実の政策展開においては総合知の名のもとに課題解決、理工系との連携等が強調され、全国では今 COInext (Center of Innovation) が動いている。それらが総合知のモデルになっており、そこに人文・社会科学が参加していることをポジティブに評価するという資料が次々に出てくるという構造である。また、ムーンショットの新しい目標が2つ追加されたが、そのうちの1つのプログラムの代表は仏教学の研究者（京大の人と社会の未来研究院）である。人文系ということで目玉になっているが、内容はブレインサイエンス・ニューロサイエンスと人文学の組み合わせによってウェルビーイングを改革していくというモデルになっている。私たちがイメージする人文学固有の振興策は、文科省が何か考えているかという程度で、CSTI のレベルではほとんど見えてこないというのが現実である。そのような CSTI 的なものに対しては巨額の資金が出るが、議員の中で人文・社会科学的な専門性を持っているのは上山隆大常勤議員のみで、産業界ではみずほファイナンシャルグループの会長が経済学部出身、あとは学者を含め工学系である。人文学、社会科学のリアルな感覚を持っている人が政策立案にあまり参加していないというのが現実である。これから大変だろうなと思う。今回の学術会議ワーキングでは、西山会員と私も参加して人文学・社会科学の大学院と理工系大学院の事情の大きな違いをちゃんと視野に入れて議論しようと言っている。皆さんから現場のリアリティを伝えてもらい、それを盛り込みみたいと思っている。

吉水千鶴子会員：研究力について話したい。私の所属する筑波大学では、研究力とは大学のランキングを上げること、科研費の獲得件数を増やすこと、イノベーションを起こすことだという評価のもとにあるので、大学内でも定量的評価ができない部分の大きい人文・社会系は質の評価を認めてもらえず、四苦八苦している。それが日本全体の状況だと思う。小林幹事から CSTI の話があったように、理系・科学技術の発展に対して人文・社会科学も貢献することを求められているのだと思うが、文化の保存・継承といった人文学特有のこと、あるいは社会科学特有のものがあり、私たちが十分に貢献できる部分がある。それらをこちらから

アピールしなければならない。学術会議に関しては、任命問題、軍事研究の問題がいまだに引っかかっている、それに対する評価が政府の間に残っているのではないかと思ったのは、日曜日のフジテレビ系の報道で橋下徹と河野太郎の対談があり、そこで河野さんが「学術会議が防衛省の予算で研究することはまかりならんと言ひ大学がそれに従っている、それに従って防衛省の予算では研究しないという大学には科研費を与えない」との発言をしたと同僚から聞いた。文字起こししたものがネットに載っており、いまだに自民党がそのような認識を持っていることに改めて驚いた。さまざまな問題が解決していないせいもあるかと思うが、元凶は政府が人文・社会系は左翼的なものというイメージを持っているところにあり、私たちが考えていることを社会に対して発信していくしか道はないという気がしている。

橋本伸也部長：溝端副部長より DX について補足的に何かあれば、人社の分科会との絡みも含めてお願いしたい。

溝端佐登史副部長：「あり方」に直接関係するのは研究力だが、オープンサイエンスの方は第三部がリードすることは皆さんもお分かりと思う。分野ごとの違いが大きく、今回の答申でも分野ごとの違いも含めてデータサイエンス・オープンサイエンスのところはどうなっているか述べてほしいと書かれており、その部分をきちんと伝えていくことが重要だ。データそのものの考え方が、人社系と第三部のような理系ではかなり異なる。理系の場合はデータができた時には研究が終わっている普通の状態だが、文系の場合はデータができてからが研究というところがある。そもそものスタンスの違いをどのように考えるか。セキュリティの話も出たが、どのように考えていくか分野ごとの違いもある。第一部からは、木部暢子連携会員が入っているので人文系の議論もしてもらえと思う。そこを意識しながら、議論に参加できると思う。

橋本伸也部長：関連して、他に発言はないか。

西田真也会員：溝端副部長の分科会にも関係しているが、現場の研究力のイメージ、研究価値が文系と理系で異なっていると言うが、理系でも、例えば生物の人にとっては役に立つと思われないことが使われることがある。使う側の役に立つかどうかという視点で見ると、ぼうっと研究に没頭している層がいるからこそよくて、後者の価値をどのように示していくかがおそらく重要である。個人的にはデジタルヒューマニティーズ等があると思っており、文系でぼうっとやってきて大量に蓄積したノウハウが機械学習等で価値を生むのだというストーリーが成立すれば、文系の人好きなことをやり続けつつ、役に立ちたいと思っている情報学系の人があるようなデータを使うことができる。みなさんが直接研究に貢献するというストーリーの間にそれを使うプロデューサー的な情報学の人が入ってくるのではないかと、個人的には考えている。

橋本伸也部長：研究力委員会からは、各分科会に調査の依頼がきている。これにきちんと回答し各分野・各大学の様子を収集することが最重要と思われるので、各分野別委員会・分科会等が回答を提出することが、先ほど鈴木会員が言及した第一部の声をに入れていくことになる。自由記述欄はあるか？

西山慶彦会員：a、b、cと3項目になっており、自由記述欄は作らなかった。

橋本部長：提出時にそれぞれについて自分たちの考えを付け加えることはできると思うので、時間的に限られた中（5月6日まで）での作業にはなるが、ぜひお願いしたい。DXの方も、同様の形で意見集約をすることになると思う。会員から意見を募ると同時に、こちらは時間もあるので部としての対応も考えられるだろうと思っている。

西山慶彦会員：部長発言のとおり、会員にアンケートを依頼している。その中に、研究時間をどのように確保できるかというスペシフィックな問いがあるが、各大学で良い取組等があれば紹介してもらえるとありがたい。今回のアンケートではこれまでどのようなものを出してきたかを集約するのが趣旨だが、独自に欄を作って「このような取組をしている、このように思う」といった意見をもらいたい。

橋本伸也部長：ややゲリラ的な提案をしてしまったかもしれないが、研究力委員会でこのように進めてくれているので、ぜひ協力してほしい。残りの時間で、(4)「その他の分科会のあり方について」(総会資料参照)は、今日の午後かなり時間を取って議論した。第三部の小委員会について第三部会員がディフェンドしたという印象があり、分科会のあり方をどうしようかという提起した側とは、かなり違うところに時間が割かれしまった。これは分科会の設置方法、連携会員の活躍のあり方等、様々な要素を含んだ形で考えていかなければならないテーマである。一方で、極めて多くの制約要因がある中で、より有効な活動をしていくためには何が必要かという観点からの整理も要る。そのような性格のものだったと思っている。あれで何かが決まるわけではなく、今後総会等の場を通じて検討が進められていくことになるが、同時に今期末には次期に向けて分科会のあり方をどうするかについて明確な方向を出さなければならない。引き続き各分科会等でも議論してもらいたい。今日示されたのは、必ずしも十分ではなかったかもしれないが、現状がどうなっているかについての驚くようなデータであった。小委員会が多数あり、そこに会員でも連携会員でもない人がたくさんいて活動しているという第一部ではほとんど知らなかったものが出てきている。学術会議の今の設置形態のもとでの活動の相応しいあり方を前提にしながら、どのような分科会の作り方をするか、或いは全体の組織形態を考えればいいのか等、かなり難しい問題が込められている。あのデータをじっくり見てもらい、何が問題なのかを考えてほしい。本件については、改め

て議論の機会を設けることになると思う。最後に夏季部会について、先ほど予算の説明で言及された点について相談したい。今回の総会前には様々なことが出てきたし役員はそれに手を取られていたため、夏季部会まで考えられなかったというのが正直なところだ。コロナ以前であれば今頃、夏季部会の時期・場所・ホスト大学・公開シンポジウム等の提案をしなければならないところ、今回はそこまでの余力がなかったことと同時に、政府による学術会議のあり方についての検討結果が夏頃に出ると言われているので、日程設定が難しいところではあるが、それも含めて部会の場で学術会議のあり方について議論する必要があると考えている。そのような観点から、第三部は北海道に行くそうだが、第一部は庁舎とオンラインの併用になると思う。じっくり時間を取って様々な懸案について丁寧な議論をする場と位置付けると同時に、今日総会でも話があったようにこの一年半様々な課題を限定された時間の中でこなしながら進めてきたので、会員間の交流の機会がなかったという残念な状況が続いてきた。夏季部会の場で全く自由に話す時間を取れるようであれば、個人的にはそうしたいと考えている。以上のことを想定しつつ、8月中の開催を目指し5、6月に日程調整を行う。夏季部会で交通費を使うと他に回らなくなるとの意見もあろうが、できるだけ参加してほしい。日程、内容等については、今後詰めていく。最後に何かあれば、発言してほしい。

芳賀満会員：単なる思いつきだが、夏季部会では「総合知」とは何かを取り上げてはどうか。文句ばかり言ってもいけないので、私たちが考える「総合知」を議論しては。

橋本伸也部長：人文・社会科学の役割の分科会での議論等も重なっていくと思うので、一つの案として考えたい。この二日間の長時間にわたる議論への参加に感謝する。設置形態の問題は依然として予断を許さない状況で、幹事会メンバーは私たちの考えをどのように入れ込んでいくかについて努力している。昨日、任命問題に関して会長から会員の意思こそが力だとの発言があったが、あり方問題も同様に引き続き協力してほしい。

以 上